報告
report

九州大学伊都キャンパスの景観デザイン

坂井　猛　九州大学大学院助教授
鶴崎直樹　九州大学大学院　助手

The landscape desing of the Kyushu university ito campus

1．はじめに

九州大学は、世界規模で劇的に変化する社会に対応するために、全国に先駆けて大学院を研究組織と教育組織に分けた学府・研究院制度を導入するなど、1911(明治44)年創設以来の大規模な改革を行った。それにもとづき、システム生命科学、ビジネス・スクール等の新たな専門領域が生み出されている。大学改革によって実現する新しい時代の大学像を全国に先駆けて実現すべく、新たに伊都キャンパスを福岡市西部の糸島半島に建設中である。

伊都キャンパスの位置する糸島半島は、古代よりアジアと日本の接点であり、大陸から玄界灘を渡って様々な文化が日本に伝えられた。半島に残された古墳群や遺構がそれを物語る。

現在のキャンパスは、学生数の増加と暦年の苦しい予算事情による狭隘と老朽、キャンパスの分散、航空機騒音などの課題がある。このため、九州大学にとって、移転は長年の懸案となっていた。近年の大学を核とした地域振興を目指す福岡県、福岡市などの自治体、地元経済界の期待も手伝い、伊都キャンパス建設が福岡地域の学術研究都市構想の実現とともに動き出した。

2．自然と歴史環境の活用

伊都キャンパスは、福岡都心から車で30分弱の距離にありながら、水と緑の豊かな自然環境が残されている。九州大学新キャンパス計画専門委員会では、地盤、水工、生態、交通、都市、建築、考古学等の学内外の専門家を集めた参加型ワーキンググループ（WG）によって、用地の分析と計画の検討を行ってきた。様々な調査に基づく与条件の抽出を行い、マスタープラン、地区別基本設計、各施設設計のプロセスにおいて、専門家から指摘された課題を１つ１つ詰め、必要に応じて計画にフィードバックしている。緑地管理計画WGによる生物多様性保全、文化財WGによる古墳等の歴史環境保全、環境WGによる環境監視と健全な水循環系構築、未来型キャンパスづくりWGによる研究シーズの適用など、様々な試みを行った。法学と経済学の教官が中心になった地域連携WGは、地域との協働による大学まちの必要性を説き、経済界と自治体による学研都市推進協議会会の設立、構想づくりへと展開している。

九州大学では、古くからアジアと日本の交流の接点であったこの地域を、アジアの拠点地域として再生し発展させる、という長期的展望をもち、その核となる伊都キャンパスの整備を進めているのである。

3．未来型キャンパスづくり

九州大学評議会で決定したマスタープラン2001では、人類の遺産である埋蔵文化財を尊重し、良好な景観の沢地をはじめとする約4割の緑地を残して新たな緑地回廊で繋ぎ、周辺に対してオープンなキャンパスを目指すことを掲げている。約2kmに及ぶ長い敷地の特性に逆らわず、専門領域を横に繋いで一体的に展開し、そこから新たな学際領域を生み出す。現在、マスタープランに従って、地区別基本設計を行い、最初の工学系研究教育棟を施工中である。水素エネルギープラントの建設や、全学共通ICカード導入、再生水プラントの構築など、学内の研究シーズを生かした実験的な試みを行う未来型志向のキャンパスづくりを行っている。

4．マスタープランにおける景観デザイン

伊都キャンパスからの眺望可能な特徴的遠景要素として、博多湾、福岡市街地、背振山系と田園、地域のランドマークである可也山などがある。これらの遠景要素への眺望を積極的に活かし、キャンパスの魅力向上を図る。特に、緑地の保全に配慮しつつ、南側への眺望を活かした開放的なキャンパスを創り出すことを目指している。

遠景および周辺の山並みに配慮した建築形態を志向するとともに、敷地内で最も高い西側の山（121m）と、敷地東側に位置する水崎城址の山（95m）のそれぞれの頂部を結ぶ線をキャンパス全体のスカイラインの基準としている。造成前にあった尾根線を意識し、周辺の山並みとの調和に配慮しながら、単調で画一的でない変化のあるスカイラインを形成する。

5．パブリックスペース・デザインマニュアル

長期にわたるキャンパス整備の中で、マスタープランの精神を維持し、実現していくためには、伊都キャンパス全体に展開するパブリックスペースおよびその構成要素に関する汎用的なデザインの方針とそのマニュアルが必要であることが指摘された。そこで、2002年9月より、伊都キャンパス計画専門委員会にパブリックスペース・ワーキンググループ（W